

## 1-1 『2010年度 学生センター白書』に寄せて

学生センター長 宮崎 伸光

本書は、2008年度に伝統ある学生部から装いを改めた学生センターの3年目の活動報告です。学生センター長の任期は3年間ですから、最初の一区切りということになります。もっとも、いかに組織の名称や形が変わろうとも、大学において学生生活の支援部局がなくなるはずはありません。また、継続性もちつつ、時宜にかなった柔軟な機能を果たさなければならないことも当然です。したがって、この3年間を特別に区切って考える必要はないのかもしれませんが。

2008年度に発生した大麻事件、2009年度の新型インフルエンザの流行に続く大きな困難は、2010年度の押し詰まった3月11日の14時46分に突然訪れました。三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0の「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」に他なりません。法政大学も大きく揺れました。学内に人が比較的少ない卒業式を待つ時期であったとはいえ、市ヶ谷校地では直ちに屋外避難した学生や教職員等の数は約1,000名、都心の交通機関はほとんど麻痺し、帰宅を諦め外濠校舎で夜を明かした人は、学外からの避難者約100名を加えておよそ600名に及びました。事務部門が新校舎に移って日の浅い小金井校地では、つい先頃まで使用されていた旧事務室の窓ガラスが大破し室内に散乱しました。多摩校地の建物被害は比較的軽微ですみました。しかし市ヶ谷校地では、普段1つの建物のようにも見える55年館と58年館がねじれるように揺れたことで両者をつなぐ防火扉に不具合が生じ、511教室や薩埵ホール

の天井の一部が落ちるなど、大きな被害がありました。後には、本学の学生にも津波の犠牲者が1名あったことなども判明しますが、そうした被害の様相が明らかになるのは年度が改まった後でした。この東日本大震災により、卒業式は中止になり、学生が企画していた関連事業も全て中止になりました。

この1年は、年度を通して振り返れば、市ヶ谷校地における学生の飲酒ルールや学生ホール内に設置されるグループワークテーブルに係るルールづくりに時間をかけた年でもありました。後者は市ヶ谷サークル支援機構(CSK)との綿密な協議に基づくものであり、前者はあらゆる学生や教職員に意見表明の場が保障されたうえで策定作業が進められました。もとより学内における学生の飲酒行為には、相容れない両極の意見対立があります。そこで、結果に異論が止まないことは想定されていましたが、制度化にあたり、あらゆる学生を含む関係者の意見が求められ、ふまえられたことは、これまでにない画期的な過程でした。これは、ほんの何年か前までならば「アブナイ」手順と見なされ、実現不能だったことでしょう。

文部科学省の補助金を受けたピア・サポート関連事業は2010年度が最終年度でした。しかし、次年度からは本学の独自事業としてさらに展開することになりました。

学生センターの教職員は、みな後輩である学生の生活を支援することに喜びと誇りを感じています。本書を手にしたみなさんに、この思いが伝わることを願っています。